

Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

Episode 4



月日、久しぶりにボサノバを聴いていると、どうしても「バッファー一人間」と歌っているとしか思えない箇所がある。実は昔からその歌を聴くと、♪バッファー一人間バッファー一人間♪なのだ。これを見る人に言ったら、バッファー一人間って人と人の間で緩衝役になるような人ですかね、いい人ですね、と返ってきたが、私の頭には、なんだかぐにゃぐにゃした液状の、目も鼻もないおぼろげに人の形をした、大昔の低予算ホラー映画的な映像が浮かんでしまい、それが消えなくなっている…

さてこのような現象（人の液状化ではなく、聞き間違いないし空耳）は極めて普遍的であり、本邦においてはタモリのテレビ番組中に空耳アワーという国民的人気の（でもないか…）コーナーも存在する。

歌に限らず、人間、聞き間違いはしばしばある。私も始終ボーッとしているので常習犯だ。しかし世の中には、聞き間違え方が絶妙な人々がいて、これが結構楽しい。随分以前になるが、当時の大学院生と私との大声でのやりとり。「先生、先生、電話です。」「どこから？」「かずさの屁理屈研です。」「????」後でヘリックス研のことだと分かるのだが、とき既に遅く、私の中では大勢の白衣の人達がスーパーコンピューターを駆使して屁理屈を解析しているという妄想が膨らんでしまっている。あのとき彼女は受話器を手で塞いでいてくれたであろうか…。大学時代の友人は、空耳王とでも称されるべき奴で、誰かが「鳩が群れを成して飛んでいる。」と言うと「えつ、鳩が胸を出して飛んでいる？」と反応する等の名空耳を連発していた（私の妄



真剣な表情で細胞に薬剤を注入するマイケル型インジェクター。エッペンドルフ社から発売されている。オリンパス、ツアイス等各社の顕微鏡に設置可能。操作は非常に難しい。踊り出すと制御不能。公判中は使用不可。

想：グラマーな鳩がトップレスで飛んでいる。鳩胸だし）。こういうタイプは勝手な思い違いも多くて、「ナンチャッテことわざ・警句」集を作れるほどだった。空耳王に相応しく「他人の空耳」っていうのもあったな。一瞬本当にあるのかと思った。彼は現在、某日本最大の自動車製造会社で大勢の部下を従えているようだが、やはり「君、それじゃドジョウの下にドジョウだよ（正：柳の下にドジョウ）」とか言っているのだろうか。

今も身近に別の空耳チャンピオンが居る。チャンプの最新作は「マイケルインジェクション（正：マイクロインジェクション）（私の妄想：顕微鏡のステージの横に小さな歌手がいて細胞に注射を打っている。）」秀作は「膝祭り（正：離祭り）（妄想：神社の境内に使い古した膝が積み上げられ火が放たれる、あるいは法被姿の若い衆が互いの膝と膝を摺り合わせる山陰地方の奇祭）」同人は、空耳以外にも1LDKを1部屋+Living+Daidokoro+Kitchenだと長く信じていた等スマッシュヒットを多数出している。他の人も時々やってくれる。我が秘書さん（個人情報保護法違反？御免）は購入した備品の確認か何かの際、真顔で私に「亀の付いた顕微鏡ってどこにありますか？」と尋ねた（正：カメラの付いた顕微鏡）（皆さんも想像してください。愉快です）。



亀付き顕微鏡。亀はオリンパス、ツアイス等各社の顕微鏡のコンデンサー部分に取り付け可能。特にメリットはない。顕微鏡が熱くなってくると、逃げ出すことあり。また接眼レンズを長時間覗き込んでいると頭部を噛まれる。

ある長く海外に居た人は、結婚相手紹介サービス（こう言うんですね。昔は仲人業とか言っていた気がする）大手のツヴァイのことをずっと「ツガイ」だと思いこんでいて、洒落た名前だと感心していたそうな。「番い」じゃあんまりだ身も蓋もないと普通は思うが、外国暮らしが長いと新鮮に響くのかもしれない。なお、結婚相手紹介に疎い、縁遠い、興味がない皆さんに解説すると、ツヴァイは大手スーパーのイオングループ傘下の大規模な業者で、大勢の会員を登録したコンピューターを駆使して異性を口説くための屁理屈を研究している（妄想妄想）。ツヴァイはドイツ語で2だから（誰でも知ってるか…）、現代日本では普通一夫一妻なので二人になるってことを象徴しているのかな、と想像できる。Twoじゃ意味不明だし、dueやduexじゃ浮気されそうだし（偏見）、ドイツの堅いイメージ（？）と結婚はベストマッチなのかも知れない。でも私は「ツガイ」の生

生物学的率直さが大いに気に入っている。「あなたの相手を、遺伝子解析と動物行動学的解析から選び出します。」誰かベンチャーでやらないかな…。ところでツヴァイのHPに行くと、「先週のご成婚届出数」という数字が出ている。何だかすごいなあ。私が見たときは236人だった。多い。奇数でなくてほっとした。

空耳の亞種として音の近い漢字を取り違える例もある。私のラボの上述とはまた別のメンバは車に同乗していて「前方に悪運が立ちこめています！」と叫んだ。雰囲気は出ているが、やっぱりそれは黒雲だろうなあと思う。それにしてもうちのラボは人材豊富だ。先日は、教授室にやってきた業者さんがセルソーターの新製品について熱く語ってくれたのだが、何かが私の頭にひつかかる。よくよく聞いてみると前方錯乱光、前方錯乱光と言っている。それに気付いた私はもはやセルソーターから興味が失せて、群衆の前の方で取り乱して光を放っているヒトについて想いを巡らせることになる（正解は、前方散乱光）。やっぱりうちにはこういう人々を引き寄せる磁場があるのか。あ、この例では私の空耳である可能性もあるが、彼の間違いにマチガイナライ（信じて）。また、私の総説（いつもこのエッセイのような文を書いている訳では無く、たまには真面目なものも書くのだ）を読んで、「文が生きている。脈動感がある。」と褒めてくれた人があった。文が生きているというのは、何より嬉しい褒め言葉である。言われたときは、心底喜んだ。ただ、何か違和感もあって、自分の文を眺めていたら、エイリアンの卵みたいにドックドックと鼓動を打ち始めるのではないかという、またまた妄想にとらわれ少し怖くなつた。確かに頭痛などのときの表現として脈動感という語も使われているようだが（広辞苑には出ていない），この場合躍動感の間違いではないかと思う（この間違いを犯す人は結構多い）。

ここで紹介したことで、当人たちは、あるいは笑いものにされたと氣を悪くしたかもしれない。もしそうであれば謝りたい（えーと、著作権については追求しないように）。実際にはそのような意図は全く無い。無意識であるにしてもウイットに富む彼等空耳族は、言葉遊びの名プレイヤーとして、このギスギスした現代社会を幾分か滑らかにすることに貢献しているのだから、敬意を払いこそすれ馬鹿にする理由など無い。ご本人方も恥じることはない（空耳族は元々指摘されても平気な人が多い



本文でばれてしまっているが、私にはあらぬことを妄想する癖がある。だからかどうか、アメリ（仮映画「アメリ」に出てくる風変わりなヒロイン）に親近感を抱いている。映画の中で使われるへんてこな絵（右の犬もそう）も好きで、これは実在する画家Michael Sowaの作品である。ところでアメリ好きやSowa好きって結構居るようだ。

ので、この点はあまり心配していない）。皮肉でも何でも無く、本当にそう思う。「○×してるじゃないですか～」を連発したり、「細胞に毒素をかけてあげる」「顕微鏡に○×してあげる」等と妙な敬語（多分当人達は丁寧語のつもりだが、そうであってもありやあ変だと私は言いたい）を使うことより断然良い。空耳族には研究者の要件でもある巧まざる創造性がある。がんばれ、空耳族。世に空耳の種は尽きまじ。

＊＊＊付記：最近、本エッセイを読むという珍しい行動を取るヒトの同定に成功した（普通の人は読まんでしょう、この欄。だから好き勝手に書いている）。某特定領域NLのE編集長で、前号本欄中のアトムの話について自身のNLで言及されている。当該NLは本NLのお手本なので光榮だ。E先生、エイトマンは私も好きです。確か彼はベルトのバックルに隠してあるタバコを吸って元気を回復していて、不良高校生みたいでしたね…。なお、N教授は、深みのある鉄人28号が最高だと主張してやまない。どっかの学会で、懐かしの漫画主人公対決（世代別）シンポジウムを企画したら分野横断的に人が集まるかも…